

四七二 余、頃、諸生の為に、明儒劉戡山の著はす所の「人譜」なるものを講ず。

余頃爲_二諸生_一、講_二明儒劉戡山所_レ著人譜者_一、

【訳】私はこのごろ、塾生のために、明の儒学者の劉戡山（劉念台）の著した『人譜』というのを講義した。

四七三 戡山劉子、嘗つて平生の学ぶ所を括り、諸経の要を撮り、周子の「大極図説」に倣つて、「人極図説」を作る。因つて此の書を著はし、以つて入道の工夫を示す。

戡山劉子、嘗括_二平生之所_レ學、撮_二諸經之要_一、倣_二周子大極圖說_一、作_二人極圖說_一、因著_二此書_一、以示_二入道之工夫_一、

【訳】劉念台は、ふだん学んでいることを総括し、四書五経の重要なところを取り出して、周敦頤の著した「大極図説」に倣つて「人極図説」を作った。それで、この書を写し、人の生き方を教えた。

四七四 此の書、寥々たる一小冊といへども、綱挙目張、本末内外一以つてこれを貫く。而して自訟慎独、説き得て微に入る。先生の人となるの心は、惟これを至れりと為す。

此書也雖_二寥々一小冊_一、而綱舉目張、本末内外、一以貫_レ之、而自訟慎獨、説得_二入_レ微、先生爲_レ人之心、惟之爲_レ至。

【訳】この書はページ数の少ない小冊子ではあるが、大綱もあげられて、細目も整い一貫した論理が展開されている。そして、自分の非を認め、一人を慎むことの本質にせまつている。先生が、人としてのあり方を説かれる心は、ただこのことである。

四七五 学ぶ者苟くも熟読して、得るあれば、則ち復た多くは書を読まずといへども、以つて先聖の旨を覚りて、自ら慊らざることなかるべし。

學者苟熟讀、而有_レ得焉、則雖_二不_二復多讀_一書、而可_レ以覺_二乎先聖之旨_一、而無_レ不_二自慊_一矣_一、

【訳】学ぶ者がもし熟読して、すたとわかれば、その上に多くの書物を読まなくても、先聖の言わんとするところを覚つて、自分で満足するものだ。

四七六 有明三百年、賢儒輩出し、學術異動多し。最後に劉子世に出で、斟酌調停して、尤も其の粹を得たり。而して劉子の著、是れ又其の尤も粹なるものにして是れ余の平日敬服して信嚮するゆゑんのものなり。 丑九月十七日、録して諸生に示す。

有明三百年、賢儒輩出、學術多異動、最後劉子出_レ世、斟酌調停、尤得_二其粹_一、而劉子之著、是又其尤粹者、是余之所_二以平日敬服而信嚮_一者也、 丑九月十七日、録示_二諸生_一、

【訳】中国の明朝の時代三百年、優秀な学者が輩出した。学説の異なるものも多い。しかし、最後に劉子（劉念台）が世に出て、照合、取捨して混じりけなく最も選びぬかれた良質で優れたものとなった。それで、劉氏の著書は、最も良質で優れたもので、私には常日ごろから敬服して、心に響くものがあり、共感するのだ。

丑九月十七日、書いて諸生に示す。

四七七 宋末の隱士眞山民、嘗て田家の詩ありて云ふ、「地罌に芋栗を煨き、貴人をして知らしむるなかれ」と。余毎に此の句を誦し、深く其の幽趣を愛して已まず。

宋末隱士眞山民、嘗有_二田家詩_一云、地罌煨_二芋栗_一、莫_レ遣_二貴人知_一、余毎誦_二此句_一、深愛_二其幽趣_一不_レ已、

【訳】宋の時代の終わりの隠者であつた眞山民は、田舎を詠んだ詩でこう言った。「土間の炉で、芋や栗を焼いて食する。そのおいしさは、高い身分の人たちにはわからないだろう」と。私は、常々この句を誦し、その奥深い趣を深く愛してやまない。

四七八 今夫れ王公大人の、平生享くる所の膏粱の味、膾炙之美、珍羞盛饌、備はらざる所なし。何の山間樵夫の食を羨む所ぞ。而るに樵夫の徒、還た其の旨を秘し、貴人のこれを知らざるを幸ふ。真に一笑を發すべし。

今夫王公大人、平生所_レ享之膏粱味、膾炙之美、珍羞盛饌、莫_レ所_レ不_レ備、何所_レ羨_二乎山間樵夫之食_一、而樵夫之徒、還秘_二其旨_一、幸_二貴人之不_レ知_一之也、眞可_レ發_二一笑_一、

【訳】この時、王や貴族高位高官の人々は、常日ごろ肉やお米のおいしいご馳走、膾や炙り肉のおいしい物など珍しい豪華な料理を食べていて、準備されていないものはない。どうして、田舎の樵夫の食事など羨んだりしようか。だのに、樵夫の中には、山間の食事のおいしさを秘密にして、貴族高位高官の人たちが、これに気づかないことを願うなんて、笑うべきことではある。

四七九 然りといへども王公貴人は、則ち毎に飲食流連し、酔飽度を過ぐ。いはゆる「五味は人の口をして爽はしむる」ものなり。何ぞ以つて天下の味を言ふに足らん。而るに山人野僧、閑に投じて相招き、溪橋を渡り柴扉を叩き、地罌松火、澗実園蔬、天真の雅味を喫し、村酒の下物を供し、古今を談じ、詩文を評し、以つて一時の興を遣る。其の軽快妙趣、別に一箇の天地あり。而るに固より夫の貪味富貴躁熱の子弟輩の能く夢想する所にあらざるなり。

雖_レ然、王公貴人、則_レ毎飲食流連、酔飽過_レ度、所謂五味令_二人口爽_一者、何足_二以言_二天下之味_一、而山人野僧、投_レ閑相招、渡_二溪橋_一、叩_二柴扉_一、地罌松火、澗實園蔬、喫_二天真之雅味_一、供_二村酒之下物_一、談_二古今_一、評_二詩文_一、以遣_二一時之興_一、其輕快妙趣、別有_二一箇之天地_一、而固非_二夫貪味富貴躁熱子弟輩之所_一能夢想_二也_一、

【訳】そうだと言っても、王や身分の高い人は、飲み食いや遊びにふけり、度が過ぎるほどに酔っ払い、たらふく食べている。老子言うところの「様々な味は、人の味覚を狂わせる」ものである。だから、どうして世の中の食べ物の味について言うことができるか。山人（世を捨てて山に隠れ住む人）や野僧（いなかの僧）が暇に任せて招きあい、谷の橋を渡って、柴の戸を叩き、囲炉裏でたいまつを燃やして、木の実や野菜等自然のおいしい物を食べ、地酒の肴を出し合つて、昔話をし、詩文を評論して一時を楽しむ。このような快い素晴らしい趣は、別天地のようである。しかし、このことは味を貪り、裕福で、忙しい王や身分の高い人たちには、夢想だにできないことである。

四八〇 然らば則ち山民の此の句、独り余これを愛して已まざるのみならず、天下又自ら会心の人あらん。 丑九月二十七日、録して書生に示す。

然則山民此句、不_二獨余愛_一之不_レ已、而天下又自有_二會心之人_一矣、

丑九月廿七日、録_二示書生_一、

【訳】そうであるなら。真山民のこの句は私だけがこれを愛して已まないのではなく、天下にはまた同感する人々があるだろう。

明治十年九月二十七日、書いて書生に示す。

四八一 天地四方これを宇と謂^いふ。往古來今、これを宙と謂^いふ。

天地四方、謂^二之宇^一、往古來今、謂^二之宙^一、

【訳】東西南北、上下左右の全空間を宇という。過去現在の続く時間を宙という。

四八二 宇宙の間、惟^{ただ}此の一理あるのみ。此の理の外^{ほか}、更に何事かあらん。

宇宙之間、惟有^二此一理^一而已、此理之外、更有^二何事^一、

【訳】宇宙は、一つの秩序ある理に貫かれてている。この理の他には、秩序あるものはない。

四八三 天、此の理ありて、而る後運行常^{つね}あり。地、此^この理ありて、而る後發生窮まらず。風雨霜雪、此の理ありて、而る後順序^{たが}差はず。其れ然り而して後、造化の功成る。

天有^二此理^一、而後運行有^レ常、地有^二此理^一、而後發生不^レ窮、風雨霜雪、有^二此理^一、而後順序不^レ差、其然而後造化之功成矣、

【訳】天は、この秩序原理があるからこそ、恒常性がある。大地は、この秩序原理があるからこそ、植物が生育し続ける。さまざまな気象変化は、この秩序原理があつて、違えることなく順番にめぐる。そして、万物の創造変化がなしとげられるのだ。

四八四 人は、氣を天地の間に受く。已^{すで}に此の形を有し、又此の心を具^{そな}へて以つて生ず。而らば心の理、亦同じからざることあるなく、一ならざることあるなきなり。

人受^二氣乎天地之間^一、已有^二此形^一、又具^二此心^一以生、而心之理、亦莫^レ有^レ不^レ同也、莫^レ有^レ不^レ一也、

【訳】人は、身体を天地の間に受けている。だから、生まれながらにしてこの形をもち、また人格も備わっている。そうであるから、人格のあるべき姿は、みんな同じで、一つだ。

四八五 心の理、苟くも内に明らかなれば、則ち喜怒哀樂、おのおの各其の節を得て、身修まり家齊しとのふ。推して外に施せば、則ち刑賞黜陟ちつちよく、皆其の当を失はず。而して国と天下と、以つて勧め以つて懲らし、億兆の衆、協且つ和ならざるはなきなり。

心之理、苟明_二於内_一、則喜怒哀樂、各得_二其節_一、而身修家齊、推而施_二於外_一、則刑賞黜陟、皆不_レ失_二其當_一、而國與_二天下_一、以勸以懲、億兆之衆、莫_レ不_二協且和_一也、

【訳】その人自身の考え方が明らかになれば、喜怒哀樂などの感情の表れはそれぞれ節度にかない、身は修まり、家は斉う。それを社会に適用したならば、罰したり誉めたたえたり、功績のあるものを大事にするなど、みんなその妥当性を失わないということ。その結果、国や世の中は、善を勧め悪を罰し、万人はみんなで尊重し仲よくなるだろう。

四八六 聖人の明、夙つとに此こゝを見るあり。因つて専ら力を此こゝに用ふ。四書六經の学、是れによりて以つて興る。吾人の当まさに信従すべき所のものなり。丑十月初七日、録して書生に示す。

聖人之明、有_二夙見_一乎此、因專用_二力於此_一、四書六經之學、由_レ是以興、吾人之所_レ當_二信従_一者也、丑十月初七日、録_二示書生_一、

【訳】聖人が明らかなことは、早くからこのことを理解していた。したがって、これにこそ力をここに用いていた。四書六經の学問は、これによって興った。これこそ、私が信じて従っていることである。

四八七 「萬古の興亡を卷舒けんじよするの手、千重の雲水に出入するの身」。康節こうせつの此の句、予、毎に喜びてこれを誦す。

卷舒_二萬古興亡_一の手、出入_二千重雲水_一の身、康節此句、予每喜誦_レ之、

【訳】「繰り返す治乱興亡の歴史を一覧しながらひとける手、大自然の中に自由に入り出ることができるこの身」この康節の句を、私は、いつも喜んで口に出している。

四八八 夫れ千重雲水の裏に入り、其の幽隧ゆうすいを愛して、世間の富貴榮耀ふうきえいよう、鄙俗塵土びんじんとを以つて、曾ち其の心に入れざれば、其の人、至清且つ至高と謂ふべ

し。

夫入_二千重雲水之裏、愛_二其幽邃_一、而不_レ以_二世間富貴榮耀、鄙俗塵土_一、曾入_レ於其心、其人可_レ謂_二至清且至高_一矣、

【訳】無限に重なっている大自然の中に入り、その静かで奥深い趣を愛して、世間の富や栄誉とか、反対に卑しく下品なことにも気にかけない人を、この上なく清らかで最高の人というのである。

四八九 夫_それ至清なれば、則ち神識_{じんしき}、内に明らかに。至高なれば、則ち情累_{じようらい}、外に撓_{たわ}まず、其の襟度_{きんど}かくのごとし。此れを以つて千古を商權_{しょうかう}すれば、則ち瞭_{あき}らかなること火を觀_みるがごとく、此れを以つて当世の事を執_とれば、則ち易_{やす}きこと猶_{なほ}掌_{たなごころ}を指すがごとし。

夫至清、則神識明_二於内_一、至高則情累不_レ撓_二於外_一、其襟度如_レ此、以_レ此商_二權千古_一、則瞭如_レ觀_レ火、以_レ此執_二當世之事_一、則易猶_レ指_レ掌、

【訳】この上なく清らかであれば心はくもりなく何事もよくわかり、この上なくすぐれていれば俗世間のことに心が乱されることもない。心の持ち方は、このようなことだ。こういうことで、歴史を見れば火を見るようにはつきりとわかり、これを持つて現実の事に当たれば、何事もたやすいことは明白である。

四九〇 然り而して其の清高なるを以つての故に、亦敢_あへて手を犯して事を作_なさず、世外に超然として、花月に遊戲し、悠悠として以つて一生を送るは、真の風流の人豪なり。

丑十月廿七日、

録して書生に示す。

然而以_二其清高故_一、亦不_二敢犯_レ手作_レ事_一、超_二然世外_一、遊_二戲花月_一、悠々以送_二一生_一、眞風流人豪矣、 丑十月廿七日、 録示_二書生_一、

【訳】そうであるから、その清らかで優れているために、敢えて世間に関与しない。俗世を越えて花月を愛で、悠々として一生を過ごすのは、真に世俗的なことを越えた立派な生き方だ。

に示す。

明治十月二十七日、 録して書生

補遺

六十余年養ふ所、其の志、鉄のごとく、其の氣、虹のごとし。これを洩らし
ては雲烟うんえんと為り、これを發しては事業と為る。然り、發すると洩らすと、其
の時を得ざれば則ち不可なり。姑しばらく其の精を挾えらびて、これを文字に託し、
以つて不朽の図とと為さんものなり。今日以往、我其れ専ら事に従う所あらん。
明治十年十一月二十二日、感ずる所あり、明旦みょうたんすなわ乃ちこれを録す。

六十餘年所レ養、其志如レ鐵、其氣如レ虹、洩レ之爲ニ雲烟、發レ之爲ニ事業、然發
與レ洩、不レ得ニ其時ニ則不可、姑擇ニ其精、託ニ之文字、以爲ニ不朽之圖ニ者、今日
以往、我其有レ所ニ專從事ニ矣、明治十年十一月二十二日夜、有レ所レ感明旦乃
録之、

【訳】六十年間余りも、私の中にあつた志は鉄のように固く変わらず、心持ちは
大きな虹のように華やいでいた。これを言葉にすれば、煙のように広まっていき、
これを実際にやつていけば仕事となつた。これらのことは、その時機を得なけれ
ばできないことであつた。これからしばらくは、それらの中から選んで、それを
文字にして永遠に残つていくものとしたい。今日からは、もっぱらその仕事をし
ていくつもりだ。

明治十年十一月二十二日、感ずる所あつて、明け方になつてこれを記す。